Amo inter ruinoj

verkita de Trevor Steele
eldonita de Flandra Esperanto-Ligo, 2016
230 paĝoj

主人公トラヴィスは28歳になるオーストラリア人のエスペランチスト。離婚による精神的危機から脱出するため、1990年にソ連へ行くことを決心する。当初、エスペラントによる文通で親しくなった女性の住むウクライナのキエフで英語の教師として働くが、彼女とはうまくいかず、やがてエストニアに移る。そこで４歳ほど年下のヴィルヴェに出会い、好意を抱く。彼女はインツーリストでガイドを務める傍ら、タリン放送でも働いており、聡明で勝気、しかも美しい女性である。恋人が殺されるという衝撃を経て、こちらも次第にトラヴィスに愛を抱くようになり、やがて二人は結ばれる。

と書くと、何だかお決まりの恋愛小説のように思えるかもしれない。もちろん、練達の作者のことであるから、恋愛小説としてもよくできている。二人の会話は気が利いているし、お互いに相手に思いを寄せながら、なかなか打ち明けることができないというのも恋愛小説の常道だろう。ふたりが出会うのはようやく小説の半ばごろになってからである。そこに至るまで、ふたりがそれと知らぬまま次第に接近していくプロセスを作者は丁寧に描き出す。

同時に、ソ連の危機的状況についても作者は詳しく書き込んでいる。当時、ゴルバチョフは改革派と守旧派との板挟みにあって改革は停滞していた。ふたりが結ばれようとしていた1991年８月19日、ついに守旧派によるクーデタが発生する。首謀者である国家非常事態委員会の面々による記者会見の様子がテレビで中継される。石のように堅苦しく、無表情の男たち。国家のために何をすべきか知っているのはわれわれだ、国民はわれわれの言うことを聞いていればよい、と言わんばかりの傲岸不遜な記者会見だ。ヴィルヴェの母親は「彼らは権力を持っている。そのことだけが彼らには重要なのよ」と感想を述べる。これに対してロシア共和国大統領エリツィンを中心とする反対派が立ち上がり、クーデタは数日であっけなく失敗する。クーデタ発生直後、ふたりはタリンからモスクワへ行き、市内を見てまわる。そのあたりの描写を読んでいると、四半世紀前にテレビや新聞、雑誌の報道にかじりついて

見聞きした出来事が蘇り、ソ連の崩壊は私にとってはまさに同時代体験だったのだと改めて思う。

その他、作者は当時のウクライナ、エストニア初めソ連が直面していた問題や歴史の暗部についても触れている。例えば、登場人物たちは、ソ連の中央集権的計画経済が引き起こし、各国の独立運動のきっかけともなった環境汚染の問題について議論する。また、トラヴィスは、ユダヤ人の友人とともにキエフのバビ・ヤールの谷を訪れる。第二次世界大戦中に多数のユダヤ人が虐殺された場所である。

この作品ではエスペラントが大きな役割を果たしている。ふたりが結ばれたのはエスペラントを通じてであった。それだけではない。ヴィルヴェはエスペランチストとして、ナショナリズムの昂進を醒めた眼で見ている。彼女の母親は、エストニアの独立を主張する政党のリーダーで、シベリア流刑にも屈しない強固なナショナリストである。1939年のエストニアのソ連編入以後の歴史を占領とみなして、ソ連からの独立、ロシア人の排除を唱える。その母に対して、ヴィルヴェはエスペランチストの立場からそれをスターリンのモデルにならったショーヴィニズムだと批判し、母にショックを与えたりもする。

この作品には作者の自伝的要素が盛り込まれている。作品のもとになった体験を回想した Falantaj muroj (1997) や自伝 Konvinka kamuflaĵo (2014) を併読すれば一層面白いだろう。ただし、作者（1940年生まれ）がソ連に住んでいたのは、すでに中年に達した時期であった（主人公同様、離婚後の危機のさなかではあったが）。この作品は、青年時代の自分を当時の状況のなかに置いて、美しい女性と出会わせた、という趣がある。また作者同様、トラヴィスは外国人であって当事者ではなく、いわば傍観者、観察者である。やや意地悪にいえば、外国人がたまたまソ連の崩壊という歴史的大事件に遭遇し、美しい伴侶を得て帰還する冒険譚といえないこともない（ただし、そんなに危険な目に会うことはないが）。

文体はきわめて平易でよどみなく、エンタテインメントとしてもよくできていて、大いに楽しめる。ただし、ソ連の崩壊前夜、各地で民族主義運動が活発化し、リトアニアでは衝突事件も生じたが、戦争によって解体したわけではなく、Amo inter ruinoj というタイトルに込められた意味がいまひとつよくわからない。また、戦闘や兵士の死を暗示するような表紙も作品の内容には全くそぐわない。

（La Movado 2017年12月号に掲載）

（追記）

版元のFlandra　Esperanto-LigoのサイトにあるRetbutikoには大量の書評が掲載されているが、本書についても極めて対照的な評価を下している二つの書評が掲載されている。はじめMonatoに掲載された書評を転載したものである

（https://retbutiko.net/eo/ero/amru&cart_id=7004779.29845#recenzo）。

“Amo povas ĉion”と題するCarlo Minnajaの書評は、本書を“senriproĉa verko”だとして絶賛している。他方、Stanislavo　Belovは、本書におけるソ連・ロシア認識についても、作品としての完成度についても、ほとんど全面否定というに近い厳しい評価を下していて、“Bela fabelo pri enigma lando”というタイトルからして皮肉が感じられる。これに対する作者自身の反論も掲載されている。どちらが自分の感想により近いか、まずは作品そのものを読んでから二つの書評を読み比べてみるのも面白い。